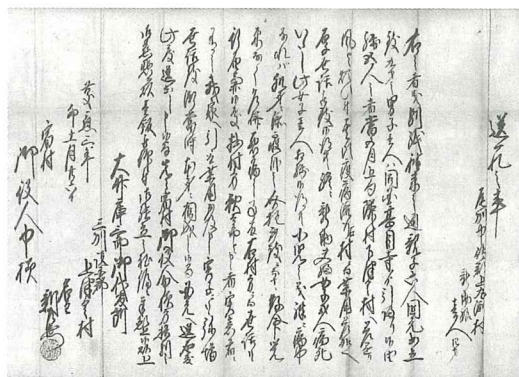


送り状に想いをよせて



尾州中嶋郡上丸瀨村の新助一家六人、諸国神社仏閣参拝のため、国元を出立。途中、甚目寺

で長男は引き返し、夫婦と娘三人の五人で五月上旬(一八六七年

六月)下津具に至り。旅の疲れに流行病を患い、一人女の子を残

して一家四人病没する。

残った女子を実意のある秋太郎さんとという人が引き取り、我が子のように添い寝などし、養生の結果、元気に回復したので

国元へ、親の遺品(金、手形、くし)などを持たせて送り出します

のでお願いします。

という内容で、役所への届け

出が慶応三年(一八六七年)十一月二十六日、新暦十二月二十日頃で、正月前に送り届けようとしたのか、もしくは雪深くなる前にと判断したのだろうか。

金龍寺の過去帳に記載があった。

慶応三年六月一日童女。六月二十日新助妻。六月二十四日新助。六月二十七日童女。病没。

病にかかり亡くなるまで約一か

月近く、村人の手厚い介護を受けることになる。梅雨から蒸れる夏の入り口。世話する側も大変だつたらう。まして、相手は疫病患者であつたのだから、なおさらそうである。

病人の世話といい、名主送り

といい、とんでもない善意で人間愛を思う。愛という思いはな

かつただらうから、親身になる

とか、他人の身になるという想

いからできる慈悲の気持ちであ

つたに違いない。

かかった経費を請求されかね

ない今の世。我々現代人が知っ

てはいるが、世相に負け、どこ

かに置き去りにしている気持ち

かもしれない。

上津具から笹暮峠を越え名倉

へ。名倉から中当、稲武町武節

と入り、笹平の庄屋さんにたど

り着く。これは一日の行程、だろ

うか。

時に慶応三年十二月九日(一八

六八年一月三日)は、王政復古が

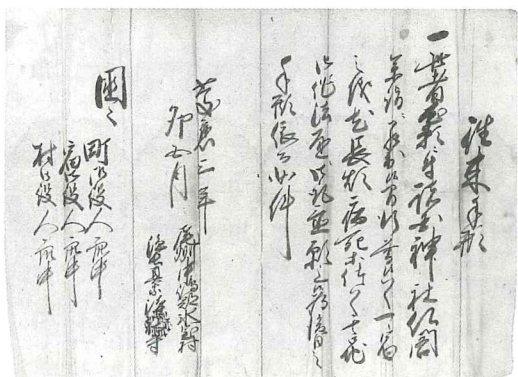
なされた日である。一月末には

戊辰戦争が勃発している。かつ

てない維新の動乱にこの四歳の

子の名主送りは足止めを食うこ

とになる。



くすし辞典を脇に置き、読み解いていく。解説と同時に映画のシーンのように画像が頭

の中で広がってゆく。と同時に、

また次から次へと疑問もわいて

くる。

どのコースから伊奈街道へ入

ったのか、知生山越えて力尽き

たのか、なぜ長男は引き返した

のか、飲み食いはどうしていた

のか、など一枚の古文書から人

と世の様子が浮かび、興味が尽

きることはない。

(設楽町文化財保護審議会委員)

金田 俊博



この写真は、名主送りの古文書である。
庄屋あるいは名主さんから名主さんへ継いで目的の地まで、書簡や品物を届ける事を願い出、お役所から許可された書状で、送る物とその理由が書かれている。
この書に書かれた送り届けるものとは、何と四歳の女子一人である。設楽町上津具から祖父江町上丸瀨村まで送り届けるというものだ。
ほればれする程の筆の走りだが、読みにくいので要約すると、

尾州中嶋郡上丸瀨村の新助一家六人、諸国神社仏閣参拝のため、国元を出立。途中、甚目寺で長男は引き返し、夫婦と娘三人の五人で五月上旬(一八六七年六月)下津具に至り。旅の疲れに流行病を患い、一人女の子を残して一家四人病没する。
残った女子を実意のある秋太郎さんとという人が引き取り、我が子のように添い寝などし、養生の結果、元気に回復したので国元へ、親の遺品(金、手形、くし)などを持たせて送り出しますのでお願いします。
という内容で、役所への届け出が慶応三年(一八六七年)十一月二十六日、新暦十二月二十日頃で、正月前に送り届けようとしたのか、もしくは雪深くなる前にと判断したのだろうか。
金龍寺の過去帳に記載があった。
慶応三年六月一日童女。六月二十日新助妻。六月二十四日新助。六月二十七日童女。病没。
病にかかり亡くなるまで約一か

月近く、村人の手厚い介護を受けることになる。梅雨から蒸れる夏の入り口。世話する側も大変だつたらう。まして、相手は疫病患者であつたのだから、なおさらそうである。
病人の世話といい、名主送りといい、とんでもない善意で人間愛を思う。愛という思いはなかつただらうから、親身になるとか、他人の身になるという想いからできる慈悲の気持ちであつたに違いない。
かかった経費を請求されかねない今の世。我々現代人が知ってはいるが、世相に負け、どこかに置き去りにしている気持ちかもしれない。
上津具から笹暮峠を越え名倉へ。名倉から中当、稲武町武節と入り、笹平の庄屋さんにたどり着く。これは一日の行程、だろうか。
時に慶応三年十二月九日(一八六八年一月三日)は、王政復古がなされた日である。一月末には戊辰戦争が勃発している。かつてない維新の動乱にこの四歳の子の名主送りは足止めを食うこととなる。